

総務文教委員会は、2月2日に福岡県みやま市で「あいさつ日本一宣言都市の取組について」と「学校給食の地元食材の納入について」、2月3日に熊本県熊本市で「熊本博物館」と「現代美術館」について視察を行いました。

#### ・あいさつ日本一宣言都市の取組について

本市では、昨年10月の市長選挙において、市長が礼儀正しい子を育てる旨の選挙公約を掲げ、当選し、この選挙公約の実現に向け取り組もうとしているところですが、そのことについて勉強するため、全国的に非常に珍しい取組であるあいさつ日本一運動について視察を行いました。

みやま市の取組は、一個人の運動から市民全体の運動として広まった典型的な例であり、非常に勉強となるものでした。

元校長であるあいさつ日本一運動推進室長が退職を機に平成16年から通学路であいさつ運動を始め、翌年の平成17年にはあいさつボランティア協会を設立し、「いつでもどこでもだれにでも」を合言葉に、小学生あいさつチャンピオン大会、あいさつ名人の認定証の交付、ワッペンやのぼり旗の販売などの取組を行っています。視察の際にこの小学生あいさつチャンピオン大会の録画を見させてもらいましたが、出場する小学生の元気なあいさつはもちろんのこと、それを見ている観客の多さに非常に驚きました。また、地元のテレビ局でもこの取組を取り上げ、たびたび放映を行っているそうです。一部の市民の運動ではなく、市民全体に広まり、成功した取組であると感じました。

また、平成21年には、こういった運動の取組が議会を動かし、議員提案で「あいさつ日本一宣言都市・みやま市」を全員一致で採択し、本年1月には新たな取組として大人を対象とした「みやま市あいさつ日本一運動市民大会」も開催されたそうです。

あいさつ日本一運動推進室長は、誰の指図も受けることなく活動したいということから、現在もボランティアで活動しており、この取組が成功したのは、あいさつ日本一運動推進室長のカリスマ性と人柄によるところが非常に大きいと感じました。

今までも様々な成功例を勉強させてもらいましたが、このようなカリスマ性を持った一個人の運動から市民全体に広まっていくのが成功する秘訣であり、行政主導では限界があると改めて痛感しました。

総社市にもこのようなカリスマ性を持った方がいるはずであり、市当局や市議会がこのような方を発掘する努力を怠ってきたことを猛省するとともに、今後はこのようなカリスマ性を持った方の発掘とその支援に力を入れていくべきと感じました。

#### ・学校給食の地元食材の納入について

本市では、本年度から「そうじゃ地・食べ委員会」による学校給食への地元食材の納入推進に向けた取組が行われていますが、不均一な大きさや変形した食材が一部納入されるため、学校給食共同調理場の職員の負担が増えるという問題が起こっており、この問題解

決に向けて勉強するため、みやま市の取組について視察を行いました。

みやま市では、小規模校1校をモデル校として、「じゃがいも、玉ねぎ、人参、だいこん」の4品目のみで、納入食材の大きさをLサイズに限定して、学校給食への地元食材の納入推進に向けた取組を行っています。

「じゃがいも、玉ねぎ、人参、だいこん」の4品目に限定している理由は、葉物は品質、量とも安定しないので、安定した納入が見込める根菜類に限定しているとのことでした。

本市が抱える問題の解決に向け、この視察の成果を糧にしていきたいと思います。

### ・熊本博物館・現代美術館について

県から旧吉備路郷土館の譲渡の話があり、市当局から旧吉備路郷土館を美術館として活用したいとの方針が示されましたが、本委員会で所管事務調査を行った結果、旧吉備路郷土館については、収蔵を主とし、一部文化財を展示する活用方法とすべきである、美術館については、今後しっかりとした構想をつくった上で整備を行うべきであるとの結論に至ったところですが、今後の参考とするため、それぞれの施設の意義や運営上の留意点などについて視察を行いました。

まず、熊本博物館については、著名な建築家である故黒川紀章氏が設計したのですが、デザイン性を重視し、窓を多く配置したため、資料にとって有害な紫外線が多く入ってくる、展示ケースも古いものばかりで密閉性がないために、有害生物の侵入があり、密閉性の高い展示ケースにする必要があるとのことでした。また、展示方法で近年求められているのが触れて体験できる展示ということで、熊本博物館でもそのような取組を行っていますが、資料が破損する恐れがあることから、レプリカで展示を行っているとのことでした。

また、文化振興の取組として、小中学校で移動博物館を行っているようですが、これも同様の理由により、破損する恐れがない資料を使っているとのことでした。

移動博物館は近年、需要が少なくなっているとのことでしたが、学校に資料が展示され、それを学芸員が解説してくれるという機会に恵まれていて、非常に羨ましく感じました。

次に、現代美術館ですが、平成18年から指定管理者制度を導入し、導入当初から現在まで熊本市美術文化振興財団が運営を行っていますが、美術館に指定管理者制度はなじまないとのことでした。館長の話によると、指定管理者制度の発祥の地であるイギリスでは、貴重な文化財や美術品を確実に後世に引き継ぐため、美術館や博物館を除く施設に指定管理者制度を導入していますが、日本に導入する際に、全ての施設に指定管理者制度が導入されるようになってしまったとのことであり、非常に説得力のあるものでした。

この現代美術館は入館料が無料（企画展を除く。）で利用でき、仕事帰りにも利用できるように午後8時まで開館しています。さらに、館内には図書室やキッズサロンも整備され、無料で鑑賞・体験できる作品も多かったです。

また、館長の尽力により、最近、有名な漫画家の企画展を行いました。非常に盛況で、全都道府県からだけではなく、海外からも来館者が訪れ、その経済波及効果は3億円とも

10億円とも言われているそうです。良い企画展を行うには、企画力と人脈というマンパワーが大きく関係するという館長の説明に納得をしました。

旧吉備路郷土館の整備や本市の美術館構想をつくっていく上で、この視察の成果を糧にしていきたいと思います。

最後に、今回の視察では、みやま市のように、市内のカリスマ性を持った方が中心となって成功した事例と、熊本市のように、市外からカリスマ性を持った方を招致して成功した事例について勉強しましたが、今後、本市で様々な取組を行う上で、非常に勉強となるものでした。

市内のものを活用した取組を成功させるには、市内のカリスマ性を持った方が中心となっていく必要があると、行政がどんなに著名な学識経験者や企業家などの市外の方を招致しても、成功することは難しいと感じました。その理由はいろいろと考えられますが、いくら著名な方を招いても、市民にはなじみの薄い人であること。常に市内にいないため、地道な取組ができないこと。取組を成功に導いたカリスマ的な方は、長期間、その取組に変人と言われるぐらいの情熱と愛着を持って取り組んでいるが、著名な方は多忙なこともあり、そこまでのことができないことなどが考えられます。

また、今回は、特異な例として、市外からカリスマ性を持った方を招致して成功した取組を勉強させてもらいましたが、このような事例は、市内のものだけでなく、市外の良いものを誘致して、市民だけでなく、市外の方も集客する場合に効果があると感じました。市外の良いものを誘致するには、情熱だけでは難しいことであり、カリスマ性を持った方の信頼性や人脈が大きく影響し、それがあってこそ成功するのだと改めて感じました。

今まで市内のカリスマ的な方の人材発掘を怠ってきたことを猛省するとともに、今後は人材発掘に力を注ぎ、その方のマンパワーを借りて、より良い総社市を実現させるために努力していきたいと思います。